

「鬼が住むと恐れられた大荒廃地『九十九谷』の森林再生」 — 下伊那郡喬木村 —

(1) 鬼の住む九十九谷

この地は古くより「鬼の住む九十九谷」と呼ばれ、谷が幾重にも入り乱れた地形を成す大荒廃地となっていました。むき出しの崖があちこちに奇怪な姿でそそり立ち、雨が降ると崖が崩れ、下流の民家や田畑を押し流す大災害を引き起こしました。

中でも、昭和2年6月に発生した集中豪雨は未曾有の被害をもたらしました。

(2) 九十九谷の森林再生に向けた取り組み

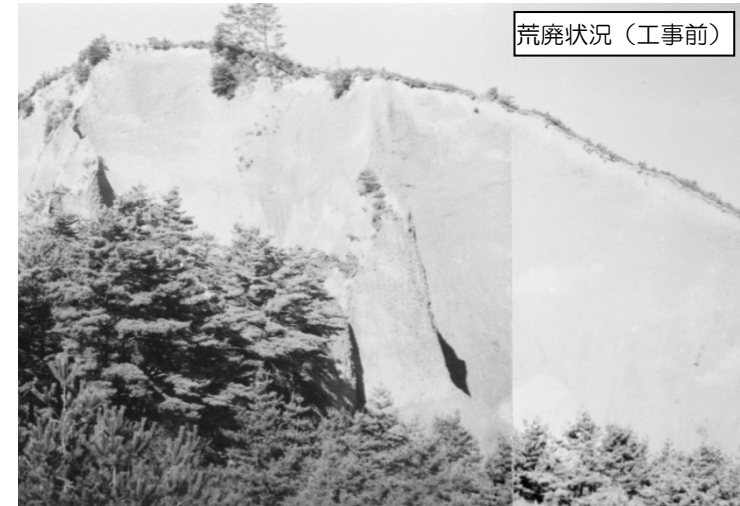
昭和 2年	集中豪雨により未曾有の被害発生
昭和 3年	先駆者湯沢重一氏の尽力により塩沢砂防組合が発足
昭和 3年	県の補助事業として工事に着手
昭和 7年	喬木村に県営荒廃地復旧事務所・喬木出張所が置かれ県の直営工事として推進されることとなる
昭和11年	喬木出張所は飯田市に移転
昭和18年	下伊那地方事務所開設とともに、県営荒廃地復旧事務所は林務課荒廃地係所管となる
昭和26年	喬木村に天竜川治山事務所が新設され、九十九谷を中心とする治山工事を担当することとなる
昭和29年	九十九谷の工事完成

(3) 工事の概要

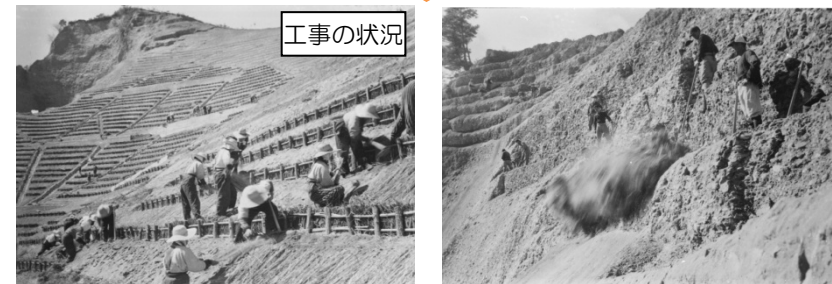
工事期間	27年
総工事費	約3,450万円（現在の価格に換算すると約15億円余）
工事内容	治山ダム46箇所（玉石コンクリート堰堤、石積谷止工など） 山腹工約43ha（法切工、石積工、編柵工、植栽工（約20万本）など）
工事従事者	延べ13万人余
その他	27年間という長い工事期間にもかかわらずケガ人は軽傷者が僅か2名

(4) 工事の成果

- ・約27万 m^3 の土砂流出を防止し地域の安定が保たれました。
- ・あらゆる人に就労の機会を与え、戦時中、主人出征中の留守を守る婦人、戦後の海外からの引揚者、復員者などの失業者の多い時代に現金収入の場として大変喜ばれました。
- ・現在は森林がよみがえり、九十九谷森林公園として自然と親しむ場に利用され、「くりん草愛好会」による花の育成保全もなされています。



荒廃状況（工事前）



工事の状況



現在の状況